The Sleeping Cheater

―愚か者の金、賢者の水銀。―

Sleeper ―――正当な価値を与えられず世に眠っている名画、またその作品を探す人の総称。

ああ、いい絵だな、と率直に思った。

送付するカタログをぶら下げて郵便局に行った。午後二時過ぎ、郵便局は十人ほどが呼び出し番号を手に順番を待っていた。待ち時間は長くても十五分くらいかと思いながら黒子も空いている席に座る。今日はこれから忙しくなることが確定している、搬入車の到着次第でもあるから読めないのではあるが出来るだけ早く職場に戻りたいものだ。

「あ…」

何気なく顔を上げ、気持ちの中で挨拶をする。意識するでもなく飛び込んできた絵画だ。

別に仕事柄注意して書画、彫刻の類に目がいくようになったわけでもなくて、細長いこの郵便局に足を踏み入れたときからそれは黒子の目を引いたのだった。自動ドアから入って右の突き当たり、記念切手やらのポスターが貼られた壁にそれは掛けられていた。額装も地味で小さく、色合いも自己主張もしていないのに、とても豊かな静謐さを閉じこめたような風景画、それ自体は何ら力強さを感じさせたり、語りかけてくるものでもないけれど、忙しない街中の郵便局にとてもよく似合っていた。が、似合っているだけにある種の悲しさも感じてしまう。

「……」カビなどないだろうか、洗浄もできたらいいけど。

せめて定期的に埃や塵を払って取るとか。

ドアが開き、外気が入りこんだ。絵への凝視を止めて何気なくそちらを見る。学生鞄を持った中学生らしき少女の二人連れだった。一人はフレームレスの眼鏡を掛けて背中まであるロングヘアを分けて縛っていた。ツインテールとは言えない控えめな縛り方が大人しい性格を現しているようで、一緒にいる方は茶が勝った髪を肩で切りそろえ、小柄だけれど活発そうに見えた。

眼鏡の少女が済まなそうにもう一人を振り返る。窓口が思うよりも混み合っているからだろう、小柄な方は合図するように小さく笑って手を振っていた、構わないと言いたげなのがわかる、ふわっと柔らかな笑みだった、からりと明るい印象ではないがとても魅力的だ。そういえば近くに中高一貫の私立の女子校があるのだった、制服で思い出す、確かミッション系で夏休み中に中等部の生徒がクラブ活動かで博物館に来たりしていた。引率の教師に言われもしたのだろうが良家の躾の行き届いた家庭で育ったという印象の生徒ばかりだったと記憶している、怪我でもしているのかどうも右足が動きにくそうなので黒子は座席を詰める。

「ありがとうございます」
少女は黒子に気付き、小さい声で礼を言うと座る。そして窓口の違う列に並ぶ友人を背中を見、すぐに黒子と同じようにひたりと絵画に視線を当てた。広告でもなく絵がある、という見付け方ではなく、絵に引き寄せられたような様子だった。元々好きなのだろう、話しかけるつもりもないけれど関心を寄せる少女を見て気持ちはあたたかになった。
「……」
揃えた膝に鞄を置いて視線は固定されたまま微動だにしない、まるで絵と会話でもしているみたいだった。
――こんなに熱い視線で見られているというのに。
黒子は嬉しい半面、少し気の毒にも思う。
先月参加した研修で、資料保存のレクチャーを受けた。その冊子には修復チームに届けられたという作品の数々が掲載されており、黒子が思う以上の破壊があることに衝撃を受けたものだ、使用する天然顔料の絵の具、繊細な和紙や絵絹という日本画は材料すべてが脆い尽くしといえるが、油絵も丈夫なカンバスに油を含んだ絵の具を乗せていくからといって、日本の風土には適さない部分がある。日本に技法が伝えられてからの時代も浅い、画家達は試行錯誤して作品を仕上げていった。自分の勤め先は科学分野で、目にしているのはもっぱら家電製品に利用されている物理の理論や科学法則のモデルだとか歴史でしかないのだが学生の時の実習を思い出した。教授のコネでうまく国立の博物館に行けることになり、企画展設営の力仕事やミュージアムショップのレジでてんやわんやだった記憶の方が濃いが、それでも修復チームや一級資料に携わる研究室の仕事を肌で感じる機会はあった。あのときはまだ学生で、触れられない世界だった。とはいえ、いま有資格だとしても判らないことばかりなのだが。
――もっといいコンディションに出来たら。
「動くな！」
突然に張り上げられた声。緩やかな空気は破られて、誰もがその場に凍り付く。と、ただ事ではない雰囲気を察知した子供がすぐさま泣き声を上げた。
「止めろ！　騒ぐな！」
カウンターに武器らしきものを打ち付ける音が重たく響いた。隣の少女はびくっと身体を縮める。絵が傾くのではないかと思うような大きさで、子供の泣き声は一層大きくなる。
「おい、黙らせろ！」
ショットガン？　それともライフルか？
突き当たりの壁側に背をつけて広くもない室内を見渡す、黒光りする銃砲がくるんだ布地からはみ出して見えた。武器があるとアピールするべく振り上げて頭上の額の縁を掠め、埃が舞い、長閑な風景を揺らしていたが、それどころではない。
待ち時間？　ついでにそんなことに構う余裕もないのだった。
思いがけない職っスよね、と目の前の黄瀬涼太は生真面目な顔でストローを啜る。

「黒子っちが博物館員なんてほんとに」
「志望したところで僕もなれるとは思いませんでしたがもぎ取れました」
「ていうか、あの門から出てきたの見たときのオレの衝撃たるや…」
「待ち合わせてたじゃないですか」
　施設通用門のはす向かいにコーヒーショップがある、明日からグアムだかハワイだかに行くという黄瀬と会う時間は昼休みしかなかった、なので赴いて貰ったはいいが彼の反応にはこちらの方が驚いた。どちらかというと黄瀬の方が学生時代からのモデル業を続行すると思ったのに映像作家の助手になると言い出すとは思わなかった。あの大抵のことは余裕綽々な赤司ですら、反応に半拍遅れたくらいだ。迷いもなく飛び込んだのは高校時代の先輩が影響しているのかも知れないが、彼は無造作に伸びた髪を縛り、ラフな格好でありながらもやはり華がある、現場でキラキラを飛ばしながらも下っ端として忙しくやっているのだろう。
「ガキだらけだし」
「しょっちゅう足踏まれますけどね」
　コーヒーの専門店だからしてバニラシェイクがないので似て非なるフラペチーノで妥協し、サンドイッチを食べる。
「払ってやりたい…」
「仕事です、お構いなく」
「塩対応、あざっす！」
　あ、いえと一応手を振る。
「視線誘導（ミスディレクション）とかちょっとした手品とかこれが案外、大ウケでして」
　塩とか砂糖でもなく、そこに黄瀬が混ざったらキケンと言いたいのであって、子供の知的好奇心育成云々の施設理念がぶち壊されかねないためである。ついでに言えば泣きじゃくる子供にはシールが一番だ、こちらは高校時代の部の先輩である日向から伝授された必殺技なのだが『最強の御札』と呼ばれている。黒子も胸ポケットに人気キャラクターだの乗り物だとかを何枚か用意していた。ちなみに今日は豪華なことに3Dホログラムにラメもあったりする、勿論黄瀬仕様というわけではない。
「じゃあオレも案内して貰えるんッスね」
「はあ。では子供さんと一緒に」入館料はまかりませんよ。
　黄瀬は何故だという顔をする。だから彼が目撃したように来館者の多くは小学生や親子連れで毎日が子供相手なのだ、どこいらかの大人気体験型施設と同じく、あくまでも対象は子供、休日の実験教室も参加は十五歳以下までとなっている。
「親子連れならともかくうちの常設展示はデートにも不向きですよ、来週からの企画展はジオラマ展示もしますけど」
「へー」
　ものすごく気のない返事だ、どちらかというとそのための準備があるから今日の夜は駄目なのだということに納得とでも言いたげだった。黒子はストローを啜ってスケジュール帳を取り出した。
「…それで、来れるのは何人でしたっけ？」
「他は知らないっスけどオレと黒子っちは確定」
　事の重大性をまるで考えていない長閑な声だ、彼にとって殆どの人生の歩みは笑って誤魔化しがきいて、それで来れてしまっている

んだろう、己の魅力を自覚してると手に負えない。よく思うことだけれどまた思った。
「え、何スか？」
「虹村先輩、来てくれませんかね…」
間違いなく彼は信用に足りる帝光中バスケ部の部長だったし、常識的な範囲で分け隔てなく後輩に制裁を加えることが出来る先輩だった。
「忙しそうっスよ？」
黄瀬はストローを啜りながらさらりと応える。たとえ会わなくなったとしても、噂は伝わるもので過去からの繋がりはパーテーションで区切れるものでもなく、脆そうでいて続くものなのだと再認識したりする。しかし黄瀬が、と意外なような気もしないではなかったが、そうですか、と黒子はそっと溜息を吐いた。
「こういうのって緑間っちとか赤司っちとかが向いてんのに」
「赤司くん、なんとか空けるって言ってますけど」スピーチやってくれませんかね？
「場があったまらないにしろやって欲しいっスねえ…」
期待はしないけれど、期待するという身勝手なことだが二人でつい頷き合ってしまう。なるべく目立ちたくない黒子と、堅苦しい場面での出場は避けたい黄瀬にしてみれば、学校側からの頼まれ事だとしても気が重いお願いには他ならなかった。帝光中バスケットボール部の創立何十周年かを祝うという目出度い席に全中三連覇を誇ったいわゆる『キセキの世代』は招かれる。というか、他の世代だってそうだ。誰が言い出したのか知らないがそれぞれで歌でも披露しろというのか。とりあえず、祝うこと自体は吝かではないにしろ、何がしかを求められるのは確実で、誰が何を披露するかという点で困ってはいた。
「ていうか『OB会』って存在自体初めて聞いたんスけど」
しかも彼は連絡係に抜擢されている、クライアントという言葉をちらつかされて断り切れなかったらしい。
「それはボクも知りませんでした…」
泣きつかれたのは黒子と桃井で、桃井は目下九州で研修中とのこと、つまりは黒子しかいなかった。
元部長の赤司に言わせれば「寄付の間口を広げただけだな」ということで、諸々の事情が察せないこともないが、それ以上黒子は口にしなかった。このごろ彼は無意識にその場に相応しい顔を選んで浮かべることが板に付きすぎてきているように思える。自分の前では素を見せてくれはするけれど容赦ないというか、相も変わらず鋭く穿つ。黒子はパンを咀嚼しながらビジネスライク過ぎる赤司の発言をぼんやりと反芻していた。
「誰かの結婚式ならスライドショーとかやれるんスけどね」
「じゃあそれで」
「いやいや。素材がないんじゃ…」
と、苦笑しながら振る手をぴたりと止めると黄瀬は機嫌良さそうに笑った。
「オレと黒子っちのメモリアルならイケるっスね」
「まったく見たくないので却下です」
学校から写真を借りてきて作れないこともないとは思うが、自分

が映っている何かを見たいとは思わなかった。三年の夏頃のものなんてきっと酷い顔をしているに違いないし、写真に閉じこめた過去を懐かしがるには早いように思ってしまう。
「緑間くんは、余裕なさそうですし」
彼は医学の道に突き進んでいる、おは朝の占いを信仰するあたりアレには変わりないが、人事を尽くすセオリーにまるでブレていない。
「赤司っちも変わってないっつーか、変わったっつーか…」
「どっちですか」
「変わった…かな、もうバスケだけしてりゃいいって年でもないッスけど、会社とか化物かって思うとこは変わんなくて、でもとっつきやすくなった気が…」
あ、だからって甘く見てないッスよ？　と黄瀬は笑って手を振った。会うことは減りはしたけれど世界が常時繋がっているいま、完全に切れることはない。黒子も高校時代の仲間やバスケでぶつかり合ったメンバーとは飲んだりしている。
「そういや、黒子っち最近、赤司っちと会ったんスか？」
「一緒に住んでます」
ふーん、そっスか。興味のなさそうな返事が聞こえ、間を措いてから
「え？」
いま聞いた言葉の意味がよく分かりませんが？　と言いたげな顔と声がした。眉は持ち上がったままだ。
「い、いつから…」
「二月からです。見付けたところがいわゆる事故物件というやつで、及び腰ではあったんですがシェアということで。確実に魔除けにもなりそうですし」
「確かに悪いものとか弾きそうですけど、御札じゃないんスから」
って、手をぶるぶると振る。そうじゃない、彼はそう訴えたいらしい。
「てか、オレ聞いてないっスよ!?」
「両親と先輩とか、火神くんと2号には伝えましたよ？」
「犬以下!?」
「え。だって紫原君と青峰君も引っ越し手伝ってくれましたからてっきり…」完全にゴチと菓子目当てだったんですけど。
「赤司っち、何したんスか？」
「何って…学生の時に起業したじゃないですか。そこの代表ですよ、いまも忙しくしてます」
「……」
黄瀬は心半分をどこかへやったような顔のままろくな話も出来ずにまた会う約束をして昼休みは終わった。

『お前は一生ここから出られないよ』と言われるのと『オレたちは一生ここから出られない』と言われるのとどちらがいいか、と訊かれたことがある。出られないものと一方的に決めつけられ、宣言されるのは癪に障るから前者は言うまでもないが、だからといって後者も端から諦めを促されているようで面白くない。黒子はどちらも